

◆東大自由英作文について(パート2)

このパートでは2016年度の写真の問題について述べていきたいと思います。

この問題設定を見た学生は、まず初めに、この写真は何だ、一体何を書けばいいんだと、考えたことでしょう。私自身も、問題を見た時、一瞬面を食らった覚えがあります。この写真を見て思うことについての英作文が求められています。勘違いしてはいけないのが、この写真の状況説明を求められているわけではないということです。この写真の説明だけをするならば、遠近法の話を中心に書き、最終的には騙し絵的な話に落ち着くのではないのでしょうか。最近の東大英語の難度の高さ・採点の厳しさを考慮すると、遠近法の話を書いた学生の英作文の得点は、それほど高くなかった、と思われます。

ところで、遠近法は英語で perspective と言いますが、この単語の一般的な意味は考え方、又は視野という意味で使われます。Get a new perspective、という表現は『考え方が変わった。』という意味になり、ネイティブが使っているのを良く見ます。遠近法という意味は受験的には細かい意味になるので、そもそも perspective という単語を使って解答を書いた学生は少なかったと思われます。

この問題を文化的な背景から掘り下げて考えてみたいと思います。

英語の有名な表現に、what you see is what you get という有名なものがあります。見たものが、あなたが得ているものだ、という意味になります。百聞は一見に如かずという意味に近いもので、英語圏の文化では、目に見えるものを重視する傾向が強く、日本文化で見られる、以心伝心的な発想はないです。直接発言しないと伝わらない文化なのです。

例えば、日本で著名な研究者がある英語の勉強方法を提唱したとします。日本人ならば、あの人が言っているのならば、それは正しい勉強方法だと簡単に受け入れてしまう傾向にあると思います。最近では下火になってきましたが、英会話学校が流行った理由も、その実際の効果よりも、その学校の宣伝を担当しているのが一流の英語の使い手だから、というのが大半の動機でした。皆様にも心当たりがあるかたがいるかもしれませんね。

一方、英語圏では、どれほど著名な人物が提唱しようとも、Does it work?(それは本当に効果があるのか?)という発想が常にあります。どれだけ高名な学者が提唱していても、自分に効果(effective)がなければその価値は認めない、というものです。

少し話がそれてしまいましたが、この問題が求めている思うこととは、

見たものが全てという考えが英語にはあるが、この考え方自体時代の風潮に合わなくなってきた。最近、インターネットの普及とともに、偽物の情報があふれかえっている。自分で見たものが安易に信じられない世の中になってきた。情報の裏側にあるメッセージを読み取る力が必要だ。そうしないと簡単に騙されてしまうぞ。これが私の考えです。

参考例

There is a famous expression in English that what you see is what you get. But this might be no longer the case. With the internet gaining the popularity and much false information abundant in our daily life you cannot always believe what you see. So we always have to try to get the hidden messages lest we be deceived.

英語圏の文化が大事にしている seeing is believing の精神がそもそもなくなっているぞ。それも、情報化社会の広がりのおかげで。加工された偽りの写真や動画がネット上ではあふれています。何が正しくて、何がそうでないのかが見分けが付かない世の中になってきている。今重要なのは、目に見える情報の裏の意図を見抜く力だ！つまり、以心伝心、腹芸を大切にする日本文化的な発想だ！

ここまで書くと、何か日本を愛する右翼的な思想の持主かと思われるかもしれませんが、私がこの問題を通じて言いたいのは、東大が求めている発想というのは、自分の通常の視点を大きく外して見て初めて、何かが見えてくるということです。解答例にも、写真、猫、指という言葉は一切使用しませんでした。これくらい、思い切った考えをしてみると、東大のような毎年英作の問題のネタを変えてくる大学に対応できる可能性が高まると思います。